

思い出の舞台になるまち ~ Special Scene for everyone ~ 大正ロマンとはじける名泉の里 大分県直入郡直入町

大分県や熊本県の内陸部には、懐かしさを感じる古きよき日本の姿を現在に伝えているまちがたくさんあります。しかし高齢化の進展や担い手不足といった問題によって、そのまちの個性や美しさを消されてしまうところも少なくなりません。しかし、画一的市街地整備によって一般に住み易いとされる都会で暮らした何年間かよりも、これらの山間の小さな町や村で過ごした何日間かの方が人の心に残るものは大きいと思います。ここでは、このような山間の町が、その姿を残しながら個性ある思い出の舞台となるためのまちづくりについて提案します。

直入町の概況

大分県と熊本県の県境に位置する大分県直入郡は、周囲を由布岳、久住連峰、阿蘇の外輪山といった、九州を代表する山々に囲まれた地域です。その直入郡の北部、大分県のほぼ中央に位置するのが直入町です。

直入町は人口 2,891 人（H12 国勢調査）、そのうち 65 歳以上のお年寄りが 35% 強、14 歳未満の子供が 10% 強と典型的な少子高齢化の進む町です。町の基幹産業は、温暖な気候と豊かな水資源を利用した農業と、国内では珍しい炭酸泉や小津留湧水を活用した観光産業に二分されています。町中は、都会とは違う懐かしさと同じ炭酸泉文化を持つドイツとの交流のせいか、宮沢賢治の世界のような少し異国の雰囲気漂う印象深いまちです。



直入町とその周辺

直入町との関わり

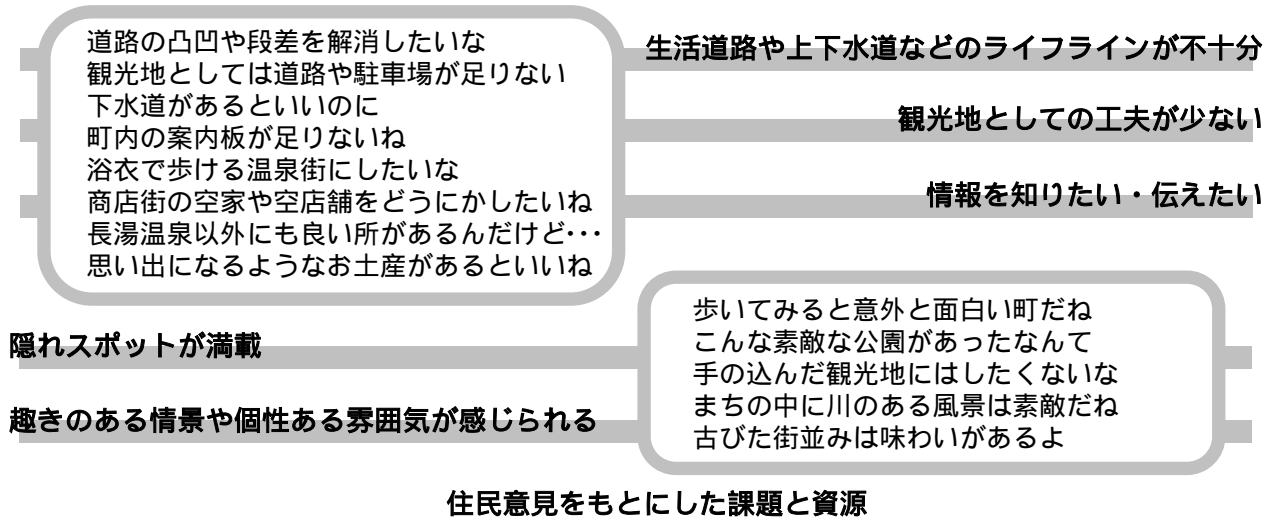
直入町は山間のわずかな平地に集落を形成しています。主要な交通網は、狭間町方面から町内を貫通し久住町方面へと抜ける（県）庄内久住線とそれらを連絡する周辺の県道・町道・農道・林道によって形成されています。この（県）庄内久住線（以下“県道”）は、観光客や農産物を運ぶ広域交通から、町中心部においては沿道に民家や商店が立ち並び一車線の道路となり、中学生の通学自転車や散歩をする老人などの細かな生活交通を支えます。

現在、この「長湯温泉地区」を中心として県道のバイパス（長湯バイパス）整備が進められています。このバイパス整備によって、町を取り巻く交通環境は大きく変化することでしょう。そこで昨年の夏に、現在の直入町の問題点と魅力を再確認し、これからの直入町の発展の可能性を探ろうという目的の下『住民ワークショップ・まちづくり研究会』が開催されました。私もこの“まちづくり研究会”に事務局という形で参加し、そのときに聞くことができた住民の声をもとにまちの新たな可能性について考えてみることにしました。

課題解決・資源活用の方向

“まちづくり研究会”では長湯温泉地区を対象にしたまち歩きを行い「課題&資源マップ」の作成を行いました。普段の生活では気づかなかった魅力が発見されたり、日常的に存在していたまちの課題に対して問題意識が生まれるなど、目に見えない成果も感じられました。

また、私のようなそこに住んでいないものから見ると、「町のメイン道路が1車線なんて!？」と問題に感じることも、そこに暮らす人にとっては「昔からそうだったから」と意外に問題視されていなかったり、また逆に、古くて趣のある建物や水辺の公園が普段の生活ではその良さに気付いていなかったりなど、外（来訪者）から見るのと内（住民）からみるのでは、まちに対する視点が異なることがわかりました。



地域の個性を活かし可能性をはぐくむまちづくりの提案

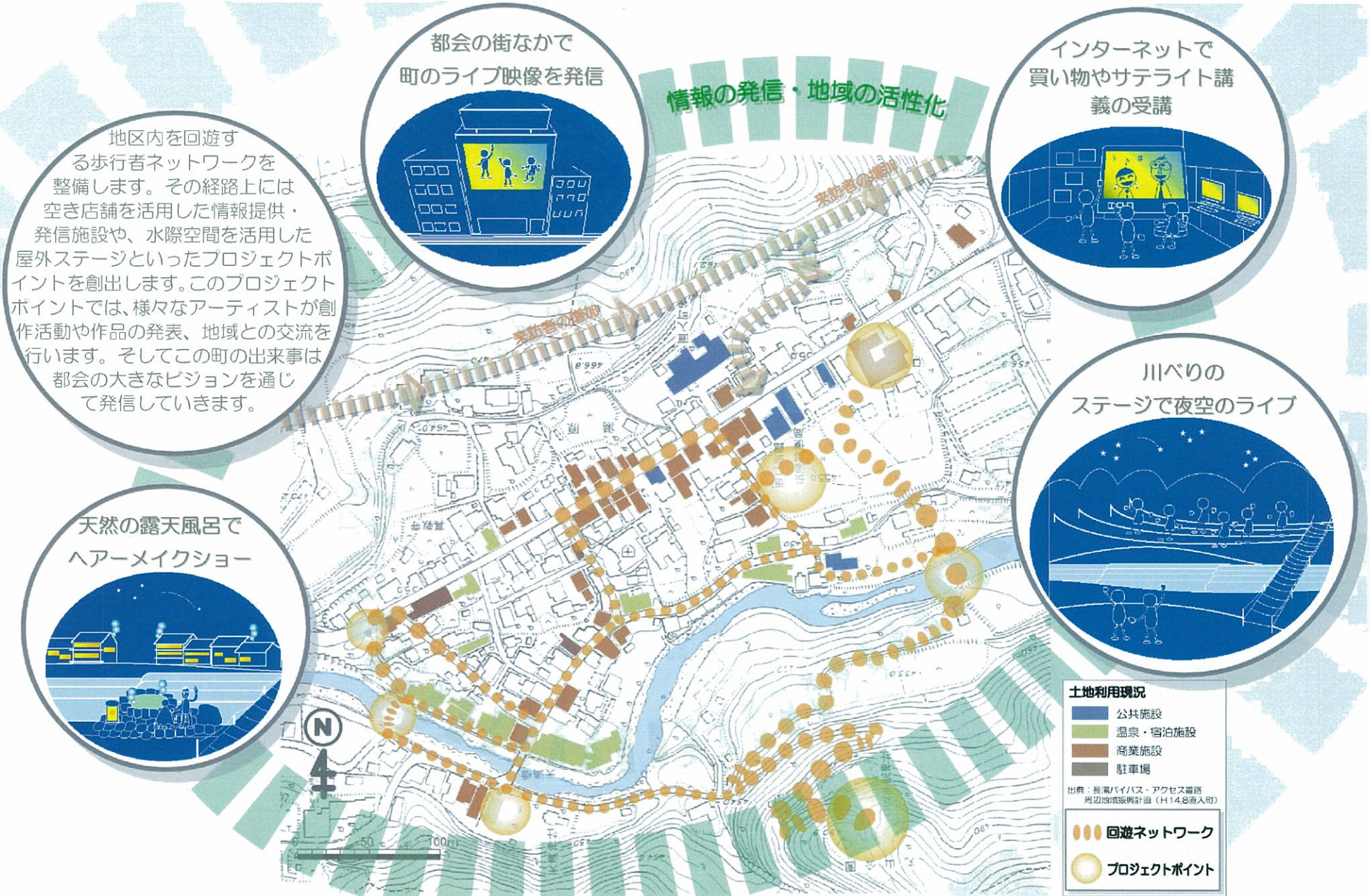
住民の方の声をもとにすると、生活の場としての最低限の機能を確保しつつ地域の個性や文化を守り、そしてそれを観光地として活かし、発展していけるまちづくりを求めていることがわかりました。また、“まちづくり研究会”に参加した中学生から「コンビニもないし CD や本はとなりの市まで行かないと買えない」という話を聞きました。モノや情報が氾濫する都会にいと必要のない情報まで与えられ、取捨選択が難しいということもよくありますが、情報に触れることで子供たちの可能性は無限に伸びるものだと思います。今の直入町の懐かしさや個性を残しつつ、情報に触れる機会を多くして子供からお年寄りまで全ての人の暮らしが楽しくなるまちづくりが必要だと思います。

そこで、新たな商業施設をつくるのではなく、長湯温泉の個性や雰囲気に賛同したアーティストや文化人を招き、その発表・創作活動・交流の場としてまちの個性をフル活用し、本や CD といった媒体を通すことなく生の文化に触れる機会を創るまちづくりを提案します。山間に位置する不利なアクセス条件は、都会の喧騒から離れ特別な場所を意識させるための演出となり、傾斜地という地形条件は、各アーティストの感性をくすぐる舞台装置の一部として活かすことができます。町なかの旅館街はアーティストやイベントに参加するオーディエンスを受入れる宿泊施設となります。

これらを実現するための受け皿として長湯温泉地区が取り組むことは、長湯バイパスの整備によって通過交通の減る町なかに、回遊性のある歩行者ネットワークを整備したり、空き家を改装してそこにインターネット導入し、情報の伝達手段、情報の提供場所を確保するということが挙げられます。

これによって、町の姿を変えることなく既存の資源を有効に活用しながら、まちの個性や魅力を様々な形で人々の心に残していくことができる「思い出の舞台」が創られると考えます。

回遊ネットワークの設定と活性化プロジェクトのイメージ



回遊ネットワークの設定と活性化プロジェクトのイメージ